

女教師を落とすため、
美熟女とハメる



目次

- 一章 恋人は未亡人の女教師
- 二章 隣家の美熟女の甘い指導
- 三章 女教師の心も身体も落とすために
- 四章 美熟女が《ママ》になった日
- 五章 未亡人から恋人へ
- 終章 女教師と美熟女に溺れる夜

一章 恋人は未亡人の女教師

バスルームから弾き出された温かな水音が、曇り硝子の引き戸に浸透する。床を這い壁を伝う飛沫の音は、やがて廊下と扉を隔てた寝室へと至り、ベッドに腰掛けていた小林悠斗の^{こばやし ゆうと}耳朶を静かに打つ。もともと、悠斗のいるマンションは一人暮らしの女性を念頭に置いた造りとなっており、防音性は高い。響いてくる水音は蝶の羽音よりも小さく、ともすれば呼吸で吹き飛ばされるほど微弱だ。

それなのに、研ぎ澄まされた少年の五感^{ごかん}は細部まで物音を拾い上げる。初夏の温暖な気温がエアコンを必要としておらず、室内が無音に等しいからだろう。シャワーだけではなく、女の柔肌を滑った湯滴が床に跳ねる音すらも聞き取れた。

(もうすぐだ……もうすぐ、先生が出てくる)

自分の彼女が湯気を纏ったあられもない姿で登場するのを妄想しながら、悠斗は部屋中央にある小さな円卓に広げられたアルバムへと視線を移した。

中学生生活の掉尾を飾った集合写真——男女を問わず制服を着た生徒達が唇を引き結ぶ中、濃紺のスーツに身を包んだ女性がしつとりと微笑んでいる。

久城春奈——数年前、まだ中学生だった悠斗のクラスを担当していた、うら若き女教師。艶やかな黒髪で腰を洗い穏やかな足取りで廊下を歩く春奈の姿を、悠斗は今でも克明に思い描ける。教室の引き戸を開く白い手に、桜色の唇が紡ぎ出す優美な声。教壇から生徒達を見回す柔和な双眸に、チョークを挟むたおやかな織指。

タイトスカートから伸びたしなやかな美脚に、校内用のパンプスで魅せられた細く絞られた足首。教科書を読み上げながら教室を逍遙し、机と机の間を通るたびに成熟した大人の女から溢れ出す甘い香りは、授業への集中を著しく乱したものだ。

(今でも……時折この時間が、夢じやないかって疑ってしまう)

男子生徒の誰もが見惚れ女子生徒の誰もが羨望した、美しくも愛らしい女教師。

そんな春奈を相手に初心で未熟な悠斗は一目で恋に落ち、そして左手の薬指に嵌められたプラチナリングの輝きが、瞬く間に淡い想いを破局へと蹴り落とした。

悠斗を含めて多くの友人が束の間の喜びから悲嘆に暮れ、それでも美しい人妻女教

師が担任になってくれた僥倖に当てられ、傷心を切り替えていった。

手を伸ばせば触れるし、誰でも話しかけることができるのに、決して想いは届かない。人妻という言葉で隔絶された、不可視の頂に咲いた高嶺の花。

そんな憧れの女教師が、今では悠斗の彼女になってくれている。

(まさか、あんなところで先生と再会できるなんて)

中学校の卒業を期に、悠斗は春奈と逢える接点を喪失した。ところが、高校二年生も終わりに近付いた頃、通学路の途中にあるレストランでアルバイトを始めたところ、偶然にも客として訪れていた春奈とばったり鉢合わせしてしまう。

思いも寄らない邂逅に歓喜した悠斗は、レストランの常連であった春奈と少しずつコンタクトを増やし、新しい出会いがもたらした縁を深めるべく専心した。

幸いなことに、単なる一生徒に過ぎなかった悠斗を春奈はすっかり覚えてくれており、教え子の成長をとて喜んでくれた。

(あの頃は、ただ先生と再会できたのが純粋に嬉しかった)

中学生の頃は報われない恋慕に身を焦がされていたものだが、数年もすれば未熟な初恋は青い思い出へと昇華される。思い人としてではなく、かつて憧れ、そして中学生だった自分を導いてくれた恩師として、悠斗は春奈との間にあるべき一線を引いた。

悠斗は少しだけ大人になり、春奈もまた教師という職分を通して成熟したのだろう。以前とは違い、暖かな陽光を彷彿とさせる雰囲気こそ薄れたが、淑やかで麗しい笑顔は一目見るだけで悠斗に活力を与えてくれた。

(でも……先生が未亡人になっていたなんて……)

レストランのマネージャーと友人であることもあつてか、春奈は頻繁に客として訪れていたが、その際はいつも独りだった。ある時、ふと気になってオーナーに春奈の夫は来店しないのかと尋ねてみた。

悠斗が春奈の教え子なこともあり、僅かな逡巡を挟んだ後、マネージャーは「他言はしないように」と念を押して、女教師は未亡人になっていたと教えてくれた。

(先生と再会できたのが嬉しくて、僕は何も気付けなかった)

思い返せば判断材料はいくらでもあつた。伴侶がいるはずなのに毎回独りで来店していること。記憶にある朗らかな笑顔が、僅かに異なっていること。話をしていても一切夫の話題が出ないこと。時折、どこか遠くを見つめて悄然としていること。

女教師を襲つた不幸に気付くことなく、ただ会える喜びに浮かれていたのが酷く恥ずかしかつた。あれだけ恋い焦がれた相手の変化に気付かず、無頓着に舞い上がっていた自分が情けなかつた。

(先生には、もう一度幸せになつてもらいたかつた)

春奈が人妻だと知つても薄れなかつた、中学生時代から尾を引く思慕。高校生になつても悠斗にとつて理想の女で在り続けただけに、伴侶を失つた未亡人の傷を癒してやりたかつた。

悠斗は心機一転し、春奈の悲しみを和らげるべく奮闘した。年上の未亡人がどうすれば心から喜び、憂いのない微笑みを取り戻せるかを模索し、同じ境遇にある者に助言を求めた。積極的に春奈とコミュニケーションを取り、おかしみ溢れる話題を呈することで未亡人の笑顔を引き出した。

未熟ながらも熱意が功を奏したらしく、徐々にだが春奈はかつて咲かせていた明るい笑顔をみせるようになっていった。

(あの時は、本当に先生を悲しい思いから遠ざけたい一心だつた)

相手は初恋の相手であると同時に、恩師でもある。この界限ではトップクラスの進学校である斎美市立高校に入学し、現在でも最上位の成績をキープしているのは、ひとえに春奈のおかげだ。考査の平均を大きく下げていた古典や漢文も、当該科目担当であつた春奈の丁寧な指導によつて、飛躍的に改善した。

何より、春奈にみつともない姿は見せられないという、浅ましくも純真な見栄が悠

斗の学力を大きく底上げした。一般的な恩師の在り方とは多少違うかもしれないが、春奈が教鞭を執ってくれたからこそ、今の悠斗があるのに間違いはない。

それだけに、春奈への恩返しをしたい気持ちも後押しして、自分でも驚くほど積極的に話しかけていたものだ。

（先生と会って話をするたびに、想いが蘇っていった）

当初は純粹に春奈を元気づけ、昔のように屈託なく笑ってもらいたいがために、悠斗は行動を起こした。ところが、春奈が柔らかな表情を取り戻して行くに従い、諦観したはずの恋心に再び火が付き、気付いた時には心身を焦がす猛火と化していた。

もし、春奈がまだ人妻のままだったら、悠斗の想いは再燃することなく憧れと好意のままだっただろう。しかし、春奈が未亡人となり、伴侶が空席となっていた事実が、恋愛欲を焚き付け男としての衝動に拍車をかけた。

そして、新しく桜の花びらが舞う季節、悠斗はついに憧れの女教師へと己の秘めた恋慕を打ち明けた。

（今にして思えば、あれは告白じゃなくてプロポーズだったけれど）

春奈とは一回り近く年齢が離れているだけに、悠斗は熱烈に想いの丈を打ち明けた。中学生の時に一目惚れしたことから始まり、これからずっと共に居たいと願った。

春奈が逡巡する最中、悠斗は判決を下される被告人の如く己の心音を聞き続けた。

永遠に感じられた沈黙はやがて、女教師の小さな首肯によって報われる。

ただ、一つの約束を呑むことを条件に――。

（告白してからは、あつという間に仲が進展していった）

もとより、担任教師だけあって春奈は悠斗をよく知っている。それに加え、邂逅を経て友好を深める過程で、互いの信頼は同年代の友人以上に培われていた。

数度のデートを経てキスへと発展し、そしてついに場の雰囲気と流れから春奈の自宅で初めてのセックスに至る状況へと移り変わっていた。

（先生が、もう出てくる）

微かに鳴り響いていたシャワーの音がびたりと途切れた。濡れた肢体を拭いた春奈が寝室に戻ってくるまで、もう幾許もない。

（落ち着け……冷静になるんだ）

童貞喪失を目前にした緊張が鼓動を速める。激しい運動をしたわけでもないのに口呼吸しているのに気付き、悠斗は慌てて唇を結んだ。ヘッドボードに鎮座しているうさぎのぬいぐるみに見守られながら、腰に巻かれていたタオルを確認し、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。

セックスで大切なのは、男のリードだ。これまでだって、何をやるにも悠斗は自分から愛情の証を求め、示した。ハグをした時もファーストキスをした時も、年下であつても、すべてリードしていた。

そうしないと、春奈は何も求めてこないのはわかりきっていた。

(先生の方が、僕よりずっと緊張しているんだ)

春奈は二十八歳の未亡人だ。未成年の悠斗と異なりれっきとした大人であり、心も身体も成熟している。その自覚があるからこそ、春奈は決して悠斗を誘惑することはない。生徒に教え、導く職に就いている大人が、よりにもよって未成年であり、しかも受け持ちだった生徒と付き合うのだから、相当の勇気が必要だろう。

そうしたリスクを承知で、悠斗と付き合ってくれているのだ。未熟とわかりながらも男から手を差し伸べていくのは当然の礼節だった。

(先生が、歩いてきてる)

悠斗はベッドに腰をかけたまま居住まいを正し、膝頭に置いていた手を握り締める。しばしの沈黙の後、柔らかな躰音がびたりと扉の前で止まった。

肺の底に滞留していた空気をゆっくりと吐き出す。渴きを覚えた喉を潤すべく唾を飲んだ瞬間、音もなく扉が開いた。

(ああ……なんて綺麗な人なんだ)

直後に双眸へ飛び込んできた魅惑の女体が、悠斗の意識を釘付けにする。

中学生の頃から合算すれば、春奈の姿には何百回も見惚れている。何度会っても見飽きない魅力を帯びた女教師だが、バスタオルを一枚肢体に纏わせただけの姿は目尻が切れそうなほど童貞の双眸を見開かせた。

まだ薄い湯気を立てるなめらかな肌。ほんのりと赤みを帯びた魅惑のデコルテ。すらりと伸ばされたふとももには払拭しきれなかった水滴が浮かんでおり、それが尚更に春奈がセックスのために身を清めたという証を強調する。

身体からタオルが剥がれないよう、片腕で頼りなさげにバストトップを押さえている仕草が、エロティシズムに愛らしいアクセントを加えていた。

「待たせてしまつてごめんなさい。寒くなかつたですか？」

「い、いやっ。大丈夫だよ、先生っ」

理性の制止を無視し、本能の赴くままに女教師の半裸を凝視していた悠斗は、当人の呼びかけによってようやく正気を取り戻す。同時に、自分の犯した過ちに気付き「うあつ」と声を裏返らせた。

(ああ……しまった。また、やつちやつた)

悠斗と春奈は、元生徒と元担任教師の関係だ。互いに恋人同士となってからは、春奈を「先生」と呼ぶのは世間的に——特に、外で会う際には相応しくないなので名前と呼ぶと決めていた。

もつとも、対面時はおろか胸中でも春奈を「先生」と長年呼んでいた悠斗にとって、彼女を名で呼ぶのはかなりの緊張と集中を要する。

「小林」という、ありふれた名字のせいでも、1クラスにもう一人いた小林姓の生徒と区別をつけるべく、春奈は最初から悠斗を名前で呼んでいた。そのため、春奈は「悠斗君」と確実に呼んでくれるが、悠斗は注意しないと未だに「先生」と呼んでしまう。「もう、二人きりの時は先生はなし——って、言っているじゃないですか」

「う、ごめん。つい……」

周章から無意識に取り決めを破ってしまい、悠斗は羞恥に顔を赤らめ、女体を凝視していた瞳を遅蒔きながら逸らした。年下の彼氏を窘めた女教師は少し困ったように眉根を寄せるも、どこかおかしげに澄んだ桜唇を綻ばせた。歩を小さく刻んでベッドへと湿った足先を進め、悠斗の隣で緩やかに腰を降ろす。

成熟した二十八歳の女体を受け止め、マットレスが柔らかに沈み込んだ。

(先生のふともも……なんて綺麗でエッチなんだ)

なだらかな丸みに富んだ女教師の美臀がバスタオルを引っ張り、ただでさえ露出ししていたふとももが股座間近にまで覗く。公私に関係なく、春奈はあまり短いスカートで穿かない。教壇に立つ時は膝丈程度のタイトスカートで概ね統一されており、私生活においてはロングスカートしか見たことがなく、ふとももの有り様は想像するしかなかった。

そんなある種の神秘に覆われていた美脚の全貌が、ほんの少し手を伸ばせば触れられる距離で露出されている。想像していたよりも、ずっと白い脚肌。同級生の女子達とは異なる、成熟した女の脚肉。目で見ただけで感触すら伝わってきそうな、むっちりとしたふとももが、感動と興奮を悠斗の胸中に掻き立てる。

「悠斗君」

「あっ——う、うん」

意図せず魅入っていた視線を慌てて引き上げる。そのままにしていたら、ふとももにしゃぶり付きかねない度し難い衝動に、悠斗は忸怩たる思いに駆られた。

「誰だって、初めてはあります。心配することなんて何一つありません……ね？」

「う、うん先——は、春奈さん」

辛うじて先生という言葉を呑み込み、悠斗は大きく首肯する。

(これから……先生と初めてセックスするんだ)

童貞卒業——初めて女を抱き、性を融け合わせる淫靡な行為。少年から男になるための儀式を目前にして、極大の緊張が悠斗を蝕んでいる。

(初めてのセックスは、甘美で夢のようなものだと思っていたのに)

春奈の彼女になれた日は、あまりの嬉しさに一晩中眠れなかった。春奈と初めてデートした日は、嬉しすぎて時間の感覚がなくなっていた。当然、初めてセックスする日も、これまでで最高の幸福に耽溺できると何の根拠もなく思い込んでいた。

それなのに脱童貞を前にすると、死線に立たされたような気分になる。

(絶対、失敗できない……先生には、気持ち良くなつてもらわなくちゃいけないんだ)

春奈をリードする男なら、セックスで劣情に駆られるわけにはいかない。自分の快感の後回しにし、彼女である女教師に快感を得てもらう必要がある。

童貞でありながら未亡人を悦ばすのは、はつきりいつて難題だ。それでも、年上の女教師には甘えられない。年下の、まだ未成年の男子学生であろうと、春奈の恋人に相応しい男としての魅力を見せ付けたかった。

「タオル、取るよ」

握り締めていた掌を開き、汗に湿っていた指先をゆつくりと持ち上げる。春奈は「はい」と恥ずかしげに小さく同意し、横に座ったまま緩やかに腰を捻る。女の上半身が悠斗に向けられ、バストトップに当てられていた柔腕が静かに降ろされた。

(うわっ……先生の身体、ふわふわしてる)

折り込まれたタオルを解くべく、腋付近で重ねられた布地に指先をそつと潜らせる。途端、これまで感じたことのない温もりが悠斗の指先を受け止め、女体の柔らかさを官能の感触と共に押しつけてくる。

しっとりとした女肌の心地良さと、二十八歳の成熟した肢体の肉感とは、それだけで蒼い男子学生に未知の感動を掻き立てた。

「ん、う……あつ——」

腋周りに触れられた春奈が、こそばゆげに眉を波立たせる。女のなだらかな肩が僅かに震えた刹那、湿り気を帯びたバスタオルが女の肌から剥離した。

「う、わ——ッ」

瞬間、弾けるようにして春奈の豊乳が零れ落ちる。支えをなくして柔らかに弾む女教師の乳房が、悠斗の瞳孔に乱舞した。

(これが、先生のおっぱい……こんな可愛らしかったなんて)

中学生の頃からFカップはあると囁かれていた、嫺やかな容姿に見合わない女教師のエロティックな巨乳。その大きさは胸囲の輪郭から寸分違わないものであったが、乳房の貌とも言える先端の突起は実に愛らしい。豊かな乳房肉に対して春奈の乳輪は慎ましやかに膨らんでおり、乳首の自己主張は極めて控えめだ。

しかし、なんと言っても目を惹くのは先端の色合いだ。二十八歳の成熟した未亡人であるにもかかわらず、春奈の乳首は桃色の透明感を帯びている。穏やかで優しい性格がそのまま反映されたような、淑やかな乳房。年上の女でありながらまるで無垢な少女を思わせる淡い突起は、艶美や淫靡に先んじて可愛らしさを感じさせる。

「えっと…：あんまり見られると恥ずかしい…：です」

「う、ごめんっ」

瞳孔が開かんばかりに凝視していた悠斗を、春奈がやんわりと窘める。教師として、年頃の女子だけではなく男子生徒も相手にしているので、少年の蒼い欲望を理解してくれているのだろう。細やかな苦笑は浮かべるものの、春奈が非難する気配はない。

（ジロジロ見たら先生が嫌がるのに…：でも、こんな光景見せられたら…：）

見た目通り、豊かな美乳を素で晒すのはそれなりに負荷がかかるらしい。ブラジャーの代わりに両腕を組み、春奈は美しい艶房を掬い上げる。柔らかな乳肌がふんわり

と形を変え、女教師の腕に魅惑の双丘が乗せられた。

（先生の格好、エロすぎるよ）

春奈としては楽な格好をしているつもりなのだろうが、その仕草は男の劣情を煽るだけだ。グラビアアイドルの過激なショットを連想させる魅惑のポーズは、悠斗の心拍を高鳴らせ呼吸を激しく乱す。緊張を押しつけたペニスが勃起し始め、男の股間にかけられたタオルが卑猥な盛り上がりを見せる。

（このおっぱいを、触れられる…：）

妄想の中で春奈を剥き、疚しい気持ちで胸を揉む妄想をしていた時とは違う。春奈の彼氏として正当な権利の得て、この豊かな膨らみに触れられるのだ。

同級生達の憧れだった若き女教師を、悠斗だけが誰に知られることもなく恋人として可愛がれる優越感が、猛烈な興奮を股座に掻き立てる。

（ああ、もどかしい。こんなもの、もう邪魔なだけだ）

ペニスから放たれる卑熱が股座に籠もり、苛つきさえ覚えるむず痒い快感が溜まっていく。春奈に男性器を見られる恥ずかしさから隠していたが、年相応の羞恥心は蒼い衝動の前では無力に等しい。ぞんざいにタオルを払い除けると解放感と共に股座で

燻っていた雄熱が発散させられる。

「あっ——」

勇ましい怒張がぐんと天を衝き上げ、力強く肉鯁を張り出す。いくら男に慣れた未亡人でも、元生徒が自分から裸になったので気を吞まれたのだろう。女教師の双眸が悠斗の男根を捉える。

もつとも、胸を見ないで欲しいと言ったのに、自分は教え子の股間を注視してしまふ矛盾に恥じたのか、春奈はすぐに視線を逸らして所在なげに宙を遊弋させた。

（先生が僕のち×ぼを見た……それなら、僕だって……）

悠斗に元来備わった年頃の羞恥心は、もう燃え盛る獣欲に併吞されていた。自分の逸物が憧れの女教師の瞳にどう映ったのかなど、考える余裕すらない。

一刻も早く、未亡人のすべてを暴き出したい——悠斗の内に秘められていた獣の衝動が首輪の役目である理性ごと身体を引き摺っていく。

「あっ、悠斗、君——きゃっ」

もう、同意は求めない。彼氏が全裸ならば彼女も全裸にすべきという野蛮な論理を振り翳し、女体の下腹に落とされていたバスタオルを剥ぎ取る。

瞬間、悠斗の瞳孔が大きく開いた。唇と乳首を除けば、どこまでも美しい雪膚に敷

き詰められた、二十八歳の女肌。そこには一切のくすみもなく、日に焼けた箇所も見当たらない。

それなのに、露わになった股間に彩られた媚叢は、漆黒の艶に輝く。シャワーを浴び、しつとりと湯に濡れた秘毛が女教師の股座を彩る。透き通るような淡い色合いの乳首とは対照的に、蠱惑を撒き散らす淫靡な女股は酷く背德的だった。

（このすぐ下に先生のおま×こが……うう、ダメだ。もう我慢が……）

年上の彼女は上品に両脚を閉じているので、まだ女性器そのものは見えない。それなのに牡の劣情を煽る女叢が、艶美な輝きを放って悠斗を誘惑する。

「せ、先生っ」

女を知らない童貞の渴望が平常心を食い破り、中学生の頃から醸成されていた恋慕が獣欲に塗り潰された。野蛮な衝動が悠斗の理性を丸呑みにし、ベッドから身体を跳ね起こす。足にかかっていたタオルが床へと落ち、屹立していた牡根がぶんと勇ましく宙を薙ぐ。

いつの間にか我慢汁の染み出していた鈴口から、淡い欲液の飛沫が跳ねた。

彼女の名ではなく、教師としての呼称を口に行っているのすら、もう気付かない。

（先生とセックス……先生で童貞を捨てるんだっ）

憧れの女教師と交わる興奮に目頭を歪ませ、美唇の目と鼻の先に亀頭を突き付ける。春奈が僅かな周章と共に頬を染め、男根に沿わせた瞳で悠斗の双眸を見上げる。悠斗は欲情に駆られるまま美しい肢体に手を伸ばし、そして――。

二章 隣家の美熟女の甘い指導

食卓に着座する悠斗の耳に、隣のリビングに置かれたテレビからナイター中継が聞こえてくる。ただし、熱弁を振るう実況者も球場を占める騒音も、悠斗の意識には殆ど上がってこない。

そもそも、小林家において熱烈な野球好きは悠斗の父、勉武^{つとむ}ただ一人である。ナイターが夕食の時間に被ることが多いので、テーブルに着くと習慣的にチャンネルを合わせてしまうだけだ。

「はあ……」

4 回裏ツアアウト満塁でヒットが放たれたらしく、実況の早口と共に怒号の如き歓声^{かんせい}が沸き上がるものの、場内の熱狂とは正反対に悠斗は重い溜息を吐く。

既にテーブルには幾つもの皿が並べられ、盛りつけられた品からは濛々たる湯気が立ち上っている。餃子、小龍包、麻婆豆腐等と、中華で統一されたおかずからは豊潤な香りが放たれており、匂いを嗅ぐ者の食欲を沸き立たせる。

特に、これらメジャーな中華料理は悠斗の好物でもあり、まだ成長期ということもあって白米を併せれば茶碗三杯は平らげられる。

もつとも、それら好物を前にしても悠斗の表情は晴れない。ご馳走に色めき立つはずの双眸はひたすらに空虚であり、再び「はあ」と鉛の如き溜息が生気に欠けた唇から吐き出される。

「ちよつと悠君。いくら何でも酷いんじゃないかしら」

白米を盛りつけた茶碗が眼前に置かれ、次いで文句が降ってくる。俯きがちだった顔を上げると、そこには悠斗の母——ではなく、隣家に住む妙齡の美女——八重やえがし瑠美るみが、憤慨を隠すことなく頬を膨らませていた。

「確かに、私は料理を食べるのが専門で作るのは下手よ。ええ、それは認めるわ。料理人の夫に台所は任せきりだったもの。奈緒なお子こさんの美味しい手料理じゃなくて、出来合の料理を皿いっぱい並べられてガツカリする気持ちもわからないでもないわ」

自分の料理の腕前が悪いと自覚しながらも、その事実を忌憚なく受け入れるのはやはり女として抵抗があるらしく、瑠美の言葉には少なからぬ吝惜が混じっている。

ちなみに奈緒子——瑠美の友人にして悠斗の母は、結婚二十周年を記念して一週間ほど夫婦で海外旅行に出かけており、小林家の住人は現在悠斗のみだ。

一人にできないほど子供ではないが、一人置いていくには不安が残る——そんな曖昧な年齢の息子の監督役を買って出たのが、小林家の良き隣人である瑠美だった。

小林家と八重榎家の縁はかれこれ十五年近くに及んでおり、家ぐるみの付き合いがある。特に奈緒子と瑠美は親友同然の交友があり、時間が合えば頻繁にお茶や買い物をして行く仲だ。

十年前に夫でありプロの料理人でもあった正俊まさとしを亡くしてから、瑠美は八重榎家を一人で護っている。ただ、仕事をしており、かつ、本人の言う通り自炊が頗る苦手なこともある。二週間に一度は小林家に相伴を与りに来ている。

調理にこそ手は出さないが配膳と後片付けはすっかり手慣れており、今では悠斗以上に食器の収納場所を把握している有り様だ。

そんな隣人だけに、悠斗にとって瑠美はもう一人の母親と言っても過言ではなく、監督役としてはこれ以上適任な人物はいない。

「でもね、これはうちのお店で作ってもらったものよ。近所のスーパーで売ってる総菜と違って、すっごく美味しいんだから」

うち——とは、瑠美の実家が中華料理屋を営んでいるという意味ではない。経営学を学び、コンサルティング会社で働いていた美熟女は、現在幾つもの飲食店を経営しており、その一つに中華飯店があることに由来している。

腕の良い料理人を自らスカウトしてくるだけあって、瑠美は美食家だ。自分の舌に絶対の自信があるからだろう。文句は食べてからにしろと言わんばかりに、麻婆豆腐の盛られた小皿を悠斗の眼前にずいと突き出して来る。

「別に、瑠美さんの出してくれたご飯に文句なんてないよ」

八角の香りが立ち上る皿を、悠斗はやりわりと押し返す。分別の付かない子供ならとにかく、悠斗はもう反抗期を通り過ぎた学生だ。瑠美の着ている服がフォーマルな濃紺のタイトスーツであることから、腹を空かせた悠斗のために仕事を終えて小林家に直行してくれたのは容易にわかる。

男よけのため、プライベートな時間しか外さない結婚指輪も付けたままなのだから、自宅にも寄っていないのだろう。

そんな瑠美に感謝こそすれ、愚痴を垂れる資格などあるはずもない。

「ふうん。それじゃ、せっかく悠君の好きな料理を揃えたのに、どうしてこの世の終わりみたいな顔をしているのかしら」

麻婆豆腐をあっさり引き上げると、瑠美はいつもなら母親の座る定位置——悠斗の対面に腰を降ろした。少年の陰鬱な顔が自分の献立のせいではないとわかったからだろう。憤慨を霧散させた瑠美が頬杖を突き、一転して寛容を宿した柔らかな微笑みを浮かべる。唇の端で照明を浴びた小さなほくろが、艶やかに輝く。

童顔な母にはできない、大人の余裕を湛えた笑みだ。

「そんなの……瑠美さんには関係ないじゃないか」

事実、悠斗が沈鬱な状況に陥っているのは極めて個人的な問題だ。その一方で、氣遣ってくれた瑠美を袖にするような態度を取ってしまったのは、なんとも子供っぽい。己の浅慮な態度を、悠斗は密かに恥じた。

「あら、随分な言い草ね。ずっと昔から息子みたいに可愛がってきたのに、そうやって突っ慳貪に拒否されると、悲しくなっちゃう」

「べ、別にそういうつもりじゃ……」

声調から察するに、瑠美が悲しんでいる様子はまるでない。そもそも、自分の店を幾つも持つ才女は、悠斗を弄んだことは数あれど、その逆は一度だつてない。

それでも、単なる隣人ではなく、第二の母親とも呼べるほど頼りにしていた相手に非礼を働いたのは確かだ。

言い訳を模索して動揺する悠斗を余所に、瑠美がくすりと小さく笑った。

「彼女と、何かあったんでしょ？」

不意打ちの問いにして凶星を正確に突かれた悠斗は、思わず呻きかける。

自制心が辛うじて逆流してきた驚愕を喉で堰き止めるが、反射的に跳ねてしまった背筋や周章の反映された視線の乱れは隠しようがない。

動揺を抑えきれない悠斗の様相から、自身の指摘が正鵠を得たと確信したのでろう。隣家の美熟女は秀美な眉を緩ませ、くすりと笑った。

「悠君が真剣に悩むことっていつたら、中学以降は色恋沙汰しかないもの」

何故わかったのか——と、問われることを予め想定していたらしく、悠斗が口を開くよりも早く瑠美は解答を明示する。交渉に長けた女経営者は未熟な少年の出鼻を挫くと、頬杖を解いて机へ身体をずいと乗り出す。

「それで、何があったの？ ほら、話してみなさい」

「い、いやだよ。瑠美さんに教える必要なんてないじゃないか」

奇襲的追及に狼狽するが、悠斗は拒絶のスタンスを変えるつもりはない。瑠美の言

う通り、落ち込んでいる原因は恋人である春奈にまつわるものであったが、男女の私事を軽挙に口外できるはずもない。

瑠美は悠斗の監督をしている身ではあるが、個人の事情を無条件で話す義務はない。そもそも、あんな失態は誰にも打ち明けられるはずがなかった。

「ふうん……そう。無関係——ねえ」

空威張りで要求を撥ね除けるが、瑠美はまるで動じない。それどころか、紅い唇を寒気がするほどにつこりと吊り上げる。

「悠君、年上の未亡人に好意を持たれるにはどうすればいいか——誰がレクチャーしてあげたか、ちゃんと覚えてるかしら？」

隣家の美熟女が描き出す、完璧な微笑み。才色兼備の熟女が零す、美しい頬の綻び。しかし、美しい睫に彩られた双眸は、まったく笑っていない。

（しまった……無関係って突っぱねるのは、さすがに言いすぎた）

綺麗な笑顔に隠した少なからぬ怒気にあてられ、悠斗は喉の奥で呻く。

念願叶って意中の女教師を恋人にしたが、その奇跡的なまでの成果は決して単独の力によるものではない。

若くして未亡人となった春奈と酷似した境遇にある女性——隣家の未亡人である瑠

美からアドバイスをもらい、女を幸せにする手引きを教授してもらったからだ。

「瑠美さんのおかげで先生と付き合えるようになった——って、歓喜で半泣きになった悠君から何度も何度もお礼を言われた私が……無関係？ ふうん」

「い、いや、その……」

表情こそ笑顔なのに、瑠美の声にはまるで弾んだ気配がなく、寧ろ地の底から響いてくるような重苦しい重圧が含まれている。単に親しいだけではなく、春奈と恋仲になるべく尽力してくれた未亡人だけに、稚拙な言い訳すら紡げない。

(先生を彼女にしたいって言った時、瑠美さんは真剣に話を聞いてくれた)

再会した女教師に惚れてしまい、身近にいる未亡人に相談した頃を思い出す。

年上の女性に——それも担任だった美人教師に恋心を抱いてしまったと打ち明けても、瑠美は若気の至りとして一笑に付すことはなかった。一回り近い年齢差を咎めることもなければ実らぬ想いだと諭すこともなく、本気で恋愛の成就を応援してくれた。小洒落た身嗜みのアドバイスから女心を操るコミュニケーションの方法など、瑠美の有意な助言については枚挙に暇がない。

悠斗の背後では常に瑠美が支えてくれていたのに、当事者たる少年から無関係と断ぜられたのだ。冷静になって考えれば、恩を仇で返すようなものだ。

いくら寛容な大人の女でも、怒らない方がどうかしている。

「ごめん……瑠美さん。言いすぎたよ」

どうにも春奈が絡むと冷静さを失うな——と、悠斗は心の内で幼い自制心を自虐する。先の暴言は悠斗の本心ではなく、不本意に飛び出してしまったものだど理解してくれたのだろう。殊勝な謝罪が功を奏したらしく、瑠美は「わかればいいのよ」と、ようやく冷たい笑顔を解かしてくれた。

「結構ショックだったのよ？ 悠君の好きだった先生が彼女になってくれた時は、私なんか我が事みたいに喜んだのに、まるでのけもの扱いだもの」

「さ、さっきのは本音じゃないよ。絶対」

実際、春奈の彼氏になれた旨を伝えたところ、瑠美はこれまで見たことがないほど悠斗の成長と成功を祝福してくれたのだ。応援してくれた瑠美のためにも、春奈のよき彼氏であろうと改めて固く誓ったのを覚えている。

「本当？」

「う、うん。誓って。嘘じゃない」

身内同然ただけではなく、初恋を事実上成就させてくれた恩人でもある未亡人なのだ。隠したいことはあっても、嘘だけは吐きたくない。

「それじゃあ、悠君が落ち込んでる理由を話してくれるわよね」
莞爾——と、非の打ちどころのない笑顔が、悠斗を苦悶に唸らせる。

(やられた……まんまとハメられた)

悠斗の心ない言い分に、熟女は怒り、悲しむ様子を見せたが、幼少期から知っている隣人だけに、その言い方は本意ではないと見切っていたのだろう。

その上で傷心をアピールし、無理に聞き出すのではなく、自白させるように誘導したのだ。社会の一線で活躍する三十八歳の女経営者との駆け引きに、平々凡々な学生は見事に丸め込まれていた。

言質を取られた悠斗は反論を諦め「わかったよ」と渋々頷いた。

「ちゃんと話すけれど……笑ったりしないで、真面目に聞いてよ」

「もう、失礼ね。悠君からの相談にはいつだって真剣に応じていたじゃない。長い付き合いなんだから信頼なさい」

悠斗の憂慮とは対照的に、瑠美は自信満々にタイトスーツで覆われた胸を張る。

他人に相談したら初恋で惚けていると言われかねない片思いを、瑠美はこれまでずっと真摯に聞き届けてきた。今回も有益な助言を与えてくれるのは間違いないだろう。(それでも……話したくないなあ)

女教師と付き合う秘密を誰に話すことなく守ってくれた、どんな友人よりも信頼がおける隣家の熟女。母親に等しい瑠美にも明かしたくない事態を思い出しながら、悠斗はようやくやく食卓に置かれた蓮花を取り、まだ湯気が濛々と立ち上る麻婆豆腐を掬い上げた。

「ぶふっ、ダメ、もう我慢でき……くふっ、あははっ」

食事も終わり、一服する席を変えた小林家のリビングに、瑠美の笑声がこだまする。ソファに座った美熟女は理知に富んだ貌を原型がないまでに崩壊させ、爆笑と称して何ら過言がないまでに笑い悶える。

当初は口元を押さえていた掌はもう何の抑制も果たしておらず、寧ろ発散の間に合わないおかしみを体内から叩き出すべく、楢田のガラステーブルをバンバンと叩く。

瑠美の掌が発作的に打ち据えられ、そのたびに飲みかけの煎茶が入った湯呑みが受け皿で躍った。

「嘘吐き……笑わないって言ったのに……」

あっさり約束を反故にした未亡人に、真横で座る悠斗は呪詛を吐いて非難の睥睨を

ぶつける。そんな怨念染みた眩きも、子供のように大笑している美貌の才女にはまるで効果がない。

「だって、こんな話を聞かされて嘔き出さない方が無理よ」

笑いすぎて息も満足にできないらしく、瑠美は咳き込みながら必死の弁明をする。

(怒りたいけれど……本当にバカらしくなる出来事だったから怒れない)

両肩を痙攣させて呼吸する瑠美を尻目に、悠斗は暗澹たる溜息を吐いた。

(初セックスの興奮と緊張で、貧血起こして気絶しちゃうなんて)

数時間前——裸になった春奈への情欲が抑えきれず、女体を押し倒すべく悠斗はベッドから立ち上がった。刹那、視界に映る光景がぐにやりと歪み、きんと耳鳴りがした直後に意識が暗転する。

気付いた時にはベッドに横たわり、半泣きとなった春奈が悠斗を覗き込んでいた。

(先生を悦ばせるどころか泣かせちゃうなんて……)

意識の消失した悠斗には覚えがないが、春奈によれば糸が切れた人形のように突然倒れてしまったらしい。幸い、白目を剥いていた悠斗に何度も大声で呼びかけたところすぐに意識を取り戻したが、春奈の亡夫も似た状況から帰らぬ人となったため、本当に心配したらしい。

緊張の糸が解けた春奈が裸で抱き寄せてきてくれたのだが、生憎と涙を流して悠斗の身を案じてくれたので、疚しい気持ちなど湧きようもない。

(そのまま病院に連れていかれて、一日が終わるなんて……最悪だ)

貧血で倒れた際に頭を壁にぶつけたらしく、年上の彼女は泣き止むや否や車のキーを握り、悠斗を連行に近い形で車に押し込んだ。春奈としては、悠斗の身に万が一があっては堪らないと考えたのだろう。連れていかれた先は、よりにもよって市内で最も大きく、かつ、混雑する斎美市立病院であり、長時間待たされたあげく、診断結果は極軽度の頭皮下血腫——つまり、たんこぶという気の抜けるものだった。

これといった異常もなく春奈もようやく安堵してくれた一方で、診察料を払い終わる頃には日が暮れかけており、ただ無為に一日が終わってしまった。

(端から見れば、本当に間抜けにしか見えない)

童貞の焦りから性欲を抑えられず、緊張と興奮が貧血を招き、頭から壁にぶち当たったあげくに医者世話になる——。

誰がどう見てもコントの如き展開だ。少なくとも、第三者の視点で見れば当事者がどれだけ落ち込んでいようと喜劇にしか見えない。

瑠美から堂々と笑われてもいまいち怒る気になれないのは、悠斗自身どれだけ馬鹿

げた痴態を演じたか痛切に身に染みているからに他ならない。

「ああもう……こんな笑ったの久し振りよ。お腹痛くなりそう」

発作的な笑いが鎮静したらしく、瑠美は息を切らしながらも目尻に溜まった涙を指先で拭う。あまりにも笑いすぎて喉が渴いたらしく、熟女は湯呑みを手に取り、残っていたお茶をぐくりと一飲みし——噎せた。

「ハア……なんか、どうでもいいや。僕、部屋に戻るから」

顔を赤らめながら咳き込んでいる瑠美には、もう何を言う気力もない。意気消沈の度合いが酷すぎて、文句を言うのも億劫だった。

「ああ、こら。待ちなさい。まだ話は終わっていないでしょ」

ソファから立ち上がると、ようやく呼吸を整えた瑠美が悠斗の手首を掴んだ。

「もういいよ。今日は疲れたから、早く寝たいんだ」

春奈の裸体を前に暴走し、春奈を無駄に心配させ、春奈に醜態を晒してしまった。

少なくとも、今日の一件は彼氏としての株を下げることはあっても、上げることはない。どうすればこの途方もない汚名を返上できるのかと考えるだけで、憂鬱な気分になる。

「もう、拗ねないの。いいから座りなさい」

「うっ——わっ」

握られた手首は軽く腕を振るっただけであっさり離れたが、今度は二の腕ごと両手で抱きつかれる。瑠美の上半身が背中に触れたと感じた瞬間、身体が後ろへと倒れた。

瑠美に抱かれたまま膝が折られ、二人分の体重を受けたソファが大きく沈み込む。

「恥ずかしいのを承知で、きちんと話してくれたんだもの。ちゃんと相談に乗ってあげる」

「る、瑠美さん、もういいってばっ」

「ダメよ。約束破って笑っちゃったんだもの。大人として、きちんと誠意を見せなくちゃ私の立場がないわ」

身を振って逃れようとするものの、瑠美は伸ばした腕をしっかりと組んで離そうとしない。ただ単に拘束するどころか、より悠斗の身体を密に抱き寄せてくる。

（背中に、瑠美さんのおっぱいが……）

もつとも、相談する気が失せたのは離れて欲しい動機の一部であり、大半は拘束に伴って背中に生じるふしだらな感触から逃れたいのが本音だ。

目測だけならば春奈よりも大きい、未亡人の豊潤な巨乳。タイトスーツで覆われた瑠美の双乳だが、サイズがサイズだけに大きく撓むのが感じられる。

相手が幼い頃から慣れ親しんだ瑠美だとわかっていても、まだ成長期の最中にある若い男の身体は、本能的に女の官能を貪ろうとしてしまう。理性がいくら倫理を説こうと、牡の欲望が背中に伝う甘やかな柔らかさへと意識をねじ曲げていた。

「とはいっても、男の子の生事情となると、女の私には少し難しいわね。悠君の彼女に聞いたら、境遇も似てるしアドバイスもしやすいのだけれど」

青少年の悩ましい葛藤など知る由もない美女は、悠斗の肩に顔を乗せ「ふう」と紅唇から艶を宿した溜息を漏らす。仄かな微熱を含んだ吐息が、悠斗の耳朶を甘く誑かし、背筋にぞわぞわと甘美な痺れを惹起させた。

（普段は意識しないようにしているけれど、瑠美さんはやつぱりエロすぎるよ）

親並みに見知った隣家の未亡人だが、女としての色気はあまりにも濃厚だ。

黒艶に彩られた長い睫。ルージュを引かなくても紅い潤いを湛えた唇。高貴な猫を連想させる双眸。腰まで届きそうな艶やかな黒髪はシニヨンに纏められ、透明な産毛を残したうなじは雪のように白い。

タイトスーツに隠された女体は服越しでも優美な曲線を浮き上がらせ、グラママーな肢体を見る者に卑猥な妄想を掻き立たせる。スカートから伸ばされた媚脚はナチュラ

ルベージュのストッキングの光沢に彩られ、むっちりとした質感を帯びていた。

今年で三十八歳になったというのに、瑠美の美貌は陰る気配はない。それどころか、月日が経つごとに女としての艶を深めていく有り様だ。

（いくらエロくても、僕が好きなのは先生だ…：それなのに――）

小さい頃から瑠美のことが好きだし、信頼している。自分を男として意識する頃には、この未亡人がどれだけ女としての魅力を放っているかも理解していた。

しかし、瑠美に恋心を抱いたことは一度もない。悠斗が恋い焦がれた女は担任の女教師であって、母親のように慕った隣家の美熟女ではない。

それなのに恋慕とは関係なく、艶美な肢体を当てられた若い牡の身体は理性を無視して性欲を昂ぶらせる。

（瑠美さんの匂い…：なんて甘いんだろう）

年相応に高価なフレグランスを用いているのだろう。同級生の女子達とはまるで異なるアダルトな香りが、幻惑の毒気となって悠斗の鼻孔に侵入してくる。熟女の無自覚なフェロモンが混じった香りが嗅覚で弾け、危険な陶酔感を脳裏で弾けさせた。

（うう、まづい…：瑠美さんの匂いを嗅いでいるだけで、ち×ぽが熱くなって…）

生殖適齢期にある悠斗は、一日に三度は自慰をしないと性欲が収まらない。そんな

性欲旺盛な身体なのに、今日はまだ一度だって射精できていない。陰囊は溜まりに溜まった子胤汁を蓄えばんぱんになっており、皮袋から卑猥な皺が消えるほどに膨満している。男根は平素の何倍も猥欲に猛っており、自制心を振り払って卑肉を勃起させていく。

（こんなの瑠美さんに絶対見せられない……ばれたら変態扱いされる）

息子のように可愛がっていた隣家の少年が、実母に等しい女へ欲情を抱いていると露呈したら、それこそ突き飛ばされるだけではすまない。これまで培ってきた信頼など確実に罅が入るし、もう小林家に足を踏み入れることすらなくなるかもしれない。（もう、見ただけでわかるくらい膨らんで……）

長年懇意にくれた女性を失う可能性が浮上して戦慄する悠斗だったが、そんな心境とは裏腹に肉欲に忠実なペニスは急速に勃起していく。股間の布地は不自然に隆起し、ズボンを食い破らんばかりに繊維が引き伸ばされていった。

悠斗もそれなりに男子として成長しているため、本気で振り払えば瑠美の拘束から逃れられるだろうが、そんなことをしたら女体を傷つけかねない。

結局、悠斗にできることは焼け石に水とわかりながらも、役に立たない自制心で怒張を鎮めることだけだった。

「彼女の裸に慣れてないうちは、事前に入念なスキンシップをしたらどうかしら。時間をかけて肌と肌を直に接触させる機会を増やせば――」

もう、悠斗が逃げ出さないと思ったのだろう。男子の身体を抱えこむようにして回っていた女の腕から、ふと力が抜けた。だらりと降ろされた織手が張り詰めた男根に触れた瞬間、瑠美の声が途絶える。

未亡人が微かに息を呑んだ。不純な衝動が露呈し、悠斗の身体にぶわりと脂汗が噴き出す。

「こ、これは、あの……さつきからトイレを我慢していたから……」

焦りと不安と緊張が、苦しい言い訳を紡ぎ出す。それが嘘なのは裏返りかけた声を出してしまった悠斗自身が一番よくわかっていた。

「ふうん、さつきから――ねえ。横に並んで座っていた時は、こんな風になっていなかったはずだけだ」

穴だらけの言い訳に、決定打となる指摘が突き付けられる。何か言おうとするものの、口は金魚の如く開閉するだけで言葉が何一つ出てこない。

（ダメだ……もう、こんなにもち×ぼを勃たせていたら、何を言っても無駄だ）

昔から母親のように慕っていた、隣家の未亡人。彼女である春奈よりも遙かに長い

付き合いを持つ、限りなく身内に近い他人。

長い時間をかけて育まれた絆が軽蔑と共に唾棄される絶望に、悠斗は悄然と項垂れる。

「ふふ、ちよつと意地悪が過ぎたわね。大丈夫よ、悠君。そんなに心配しないで」

「え……う、わっ」

緊迫の静寂と不穏な沈黙に満たされた空気は、突如として朗らかとなった瑠美の声調によって弛緩する。同時に、女の両腕がゆったりと両肩から首回りにかけて絡められた。

「私だって十年前までは正俊さんがいたのよ。男の人が性欲を溜め込むと、身体が勝手に反応するってことくらい、人妻として知っているんだから」

実の息子こそいない瑠美だが、男の難儀な衝動については亡夫である正俊を通じて把握しているらしい。悠斗の勃起が決して背理なものではなく、抑えの利かない牡の暴走だと、理解を示してくれた。

（瑠美さん……僕が傷つかないように慮ってくれて……）

悠斗の激しい当惑から、何を想像していたのか読み解いてくれたのだろう。母のように親身になってくれる未亡人は、少年を暗澹に沈めまいと肩に頸を乗せて頬を触れ

合わせてくれた。

しっとりとした柔らかな頬の感触が、悠斗の全身を蝕んでいた緊張を霧散させ、冷や汗の漏出を止める。恐慌に囚われていた心も、未亡人の温かで寛恕な抱擁により穏やかに弛緩していった。

春奈の優しさとはまた異なる瑠美の温かな抱擁に、悠斗はしばし身を委ねる。

「息子みたいな男の子が私みたいなおばさんでも勃起っちゃうのは、さすがにびっくりしたけれどね。ふふ、若いからかしら。悠君、おとなしい顔して結構性欲強いのね」

「い、いやっ、違うよっ。瑠美さんがとんでもなく綺麗だから、僕は——」

まるで女なら誰彼構わずに発情する性獣だと思われては堪らず、悠斗は慌てて弁明する。その言い方が瑠美を隣家の未亡人ではなく、一人の女として褒めるものだったと気付くも、もう遅い。

言葉の選択を誤った声帯が麻痺し、両肩にかけられていた瑠美の織指が微動した。

「……ねえ、悠君」

社交辞令としての美辞麗句ではなく、周章が漏らした本音だとわかったからだろう。リビングにかけられた時計が沈黙の刻を計り、悠斗が口内に溜まった唾を呑んだ直後、紅く濡れた唇がそつと近付く。未亡人の前髪が、艶やかに煌めいた。

「こうして触れ合っていると、ドキドキする？」

「う、うん……ごめん、瑠美さん」

耳を擦る艶やかな声。妖しさを含んだ甘い匂い。凜とした大人の美貌。

悠斗の身体に密着した官能に美熟した三十八歳の肢体が、これまで培ってきた倫理と道徳を素通りし、牡の本能を蠢感している。

「それなら……私の身体で、女に慣れてみない？」

虫の音よりも小さな、それでいて悠斗の意識を大きく揺さぶる囁き。現実離れた提案は思慮することすら忘れさせ、頤を肩に乗せていた未亡人へと首が千切れんばかりの勢いで振り返った。

「うっ——わっ。る、瑠美さんっ」

驚愕を顔面に張り付けた悠斗へ、淡く妖しい微笑みを零す。身体を預けていた未亡人が突然消え、注意が散漫になっていた背中がソファへと倒れる。

いつの間にかソファから立っていた瑠美は流れるような動作で媚脚を掲げ、そのまま何の躊躇もなく悠斗の身体を跨ぎ、股間へと媚臀を落とした。

（僕の身体に、瑠美さんが乗って……）

温かな重みが、男の身体に浸透する。勃起していた男根が下腹に押しつけられ、熟

女の柔らかな質感がズボン越しに淫らな快感を惹起させた。

「悠君が彼女とのセックスを前にして倒れたのは、女慣れしていないのに原因があると思うの。それなら、私の身体で慣れておけばいいんじゃないかしら」

馬乗りとなった未亡人の織指が、シニョンを形作るヘアピンを音もなく抜いた。

ビジネスの場で邪魔にならぬように結われていたロングヘアが解かれ、腰まで流れる艶やかな黒髪がさらりと波を立てて輝く。

「悠君の彼女と比べればそんなに若くないけれど、スタイルの良さは負けないつもりよ。こう見えても、指輪をしてもデートに誘われるんだから」

女としての誇りと自信を示すように、未亡人の紅唇が艶然と微笑む。肩にかかっていた一房の黒髪を、白くしなやかな指先が柔らかに払った。コンディショナーの匂いだろうか。ふんわりと甘い匂いが香り立ち、悠斗の意識が淡く痺れた。

（瑠美さんが男からモテるなんて、言われなくてもわかる）

手首の動きに合わせ、女の二の腕に触れた豊乳が悩ましげに形を変えた。

世界で一番可愛らしい女は春奈であると、彼氏として嘘偽りなく断言できる。ただし、もつとも美しい女は誰かと問われれば、候補の筆頭として挙がるのが瑠美だ。

男なら自然と目を奪われ女なら僻みすら諦観する、非の打ちどころのない美貌。胸

のラインを大きく膨らませる円熟した双丘に、しなやかにくびれた艶腰。

熟した女臀はタイトスカートををはち切れさせんばかりに張らせ、艶脂の乗ったむっちりとした媚脚はナチュラルバージュのストッキングに輝き、煌びやかに色めく。

ヒールを履けば一七〇センチを超える未亡人は、生半可な女優では太刀打ちどころか相対する資格すらない艶美を帯びている。

そんな女が身体を自由にしていると言ったら、どんな温和な男でも野獣紛いの蛮人へと変貌するだろう。

「本当は凄く恥ずかしいけれど、悠君の失敗で大笑いしちゃったお詫びも兼ねて…：ね？ 自惚れるわけじゃないけれど、結構良い提案じゃないかしら」

「で、でも…：僕には先生が…：」

瑠美の提案は頗る魅力的なものだ。こんな艶美な女体に触れられるのなら、悪魔に魂を売れと言われても迷わずに頷いたかもしれない。

幸いにして、恋人である女教師の笑顔が、寸前で牡の欲望を押し戻した。

「悠君が彼女を大切にしているのは知っているわ。でもね、だからこそ女の予習をしなくておきじゃないかしら。またセックスで失敗したくないでしょう？」

「それ、は…：」

純愛の誓いが、ぐらりと揺らめく。春奈の前で見せた喜劇染みた醜態は、悠斗に少なからぬトラウマを負わせている。一度失敗しているだけに、次は絶対にセックスを成功させなくてはならない。

しかし、名譽挽回を誓う一方で、本当に大丈夫なのだろうかという恐怖が、決意の背後で不穩に揺らめく。女を知らない童貞だけに、また何かしら予測もつかない失態をやらかすのではないかとという懸念が亡霊の如く付きまとっていた。

（瑠美さんと練習したら、先生を悦ばせられるかも）

初めてのセックスだというのに、裸で抱き合う前に中断し、あげく春奈に余計な不安を与えて泣かせてしまった。大好きな恋人に辛い思いをさせてしまったのも、すべて悠斗が性に未熟なためだ。

瑠美から性の手解きを受け男として経験を積み、もう同じ過ちを繰り返すこともないだろう。つまり、瑠美の申し出を受けることは、最終的に春奈のためにもなるのではないか——そんな戸惑いが、背徳の正当性を主張し始めた。

「私ね、息子みたいな悠君は当然だけれど、久城さんにも幸せになってもらいたいの」

「瑠美さんが、先生を…：？」

思いもかけない未亡人の吐露に、悠斗は目を丸くする。

「年齢や立場は違うけれど、互いに未亡人で境遇が似てるもの。そんな相手だからこそ、自分が一番素敵だと思ふ男の子と結ばれて欲しいわ」

あくまで二人の将来のためであると念を押し、のし掛かっていた美熟女はそつと前傾すると、男の胸板に手を這わせる。三十八歳の魅惑が凝縮された乳房がゆざりと揺れ、悠斗は邪心を刺激しないよう視線を逸らす。

（スカートの上が…：瑠美さんのショーツがパンストに透けて…：）

重心を支えるべく、女の膝が大きく開かれたためだろう。悠斗が視線を逸らした先では艶やかなふとももが八の字に伸び、その最奥には肌とは異なる薄布が見えた。

スカートの蔭になっているので鮮明にはわからないが、それでもパンティストッキングのセンターシームがショーツの中央を走っているのは判別できる。

化繊の束に沿って媚裂が女股を割っているところを妄想し、男根がどくりと喘いだ。

（瑠美さんの身体で…：先生も幸せになれるなら…：）

美熟女の淫らな誘いが、男の理性を溶解させていく。熟れた媚脚が脇腹に柔らかに触れた。実り熟した女の乳房が、タイトスーツに包まれて緩やかに弾んでいる。

勃起した男根は布越しに未亡人の股肉を押しつけられ、色欲に灼かれて暴発せんば

かりに悶え苦しむ。

「ほら…：いらつしやい。悠君」

首肯せず、言葉にしなくとも、長年息子同然に可愛がってきた少年の目を見れば、何を求めているかわかったのだろう。

瑠美は男根の上に置いていた媚臀をふとももまで後退させ、悠斗の上半身を自由にすると大きく腕を伸ばした。指の先端まで余さず広げた、満開の花を彷彿とさせる抱擁の誘い。香しいフレグランスに魅了され、花蜜を求める蜜蜂のようにゆらりと上体を起こして熟女に近付いていく。

「う、わっ」

二の腕が瑠美の腋を潜った直後、女の腕が悠斗の背中を引き寄せた。不意を突かれる形で瑠美と密着し、柔らかな肢体の感触が弾けた。ゆっくりと触れようと考えていたので反射的に身体を離そうとすると「こらこら」と、棘のない叱責が飛ばされる。

「そんな緊張しないの。恥ずかしがらなくていいのよ」

身体に回された未亡人の掌が、優しく背を撫でる。服越しでも伝わる熟女の柔らかな温もりがじんわりと背に浸透し、不思議な安寧が湧き上がった。

（瑠美さんに抱きしめられるなんて…：何年ぶりだろう）

三十八歳の肢体に帯びた、甘く心地良い匂いが鼻を擽る。赤子をあやすような慰撫が、次第に身体から強張りを解きほぐしていく。

悠斗がまだ小学校に上がったばかりの頃、些細な静いから母親と喧嘩をした。家を飛び出し、夕暮れの公園で黄昏れていると、仕事を終えた瑠美に見つかって慰められたものだ。

瑠美が優しく抱擁してくれた感触が、ふと記憶の片隅から思い起こされる。

両の頬に当てられた柔らかな乳房の感触と、沈静と安寧を与えてくれる女の匂いに毒気を抜かれ、その後は瑠美と並んで子犬の如くおとなしく自宅に戻ったものだ。

(あの時の匂いと同じだ)

まだ二十代だった人妻と、三十代になった未亡人とは、愛用する香水の種類は異なるだろう。それなのに、美熟女が帯びた優しい匂いは不思議と同じものに感じた。

(でも、目に映る光景だけは、昔と全然違う)

小さい頃は背丈が足りなくて、乳房に埋もれてしまった顔。あれから順調に成長を続け、今では瑠美を超えるまで背丈が伸びており、眼下にある魅惑の膨らみを眺められた。

スーツのジャケットを大きく押し上げ、ブラウスに並んだボタンをはち切れさせん

ばかりに膨らませた、未亡人の媚乳。巨乳と言って差し支えない春奈のバストよりも更に大きな双丘は、タイトな服装が似合う経営者とは相反する強烈な母性を放っている。

眼福とはよく言ったもので、瑠美の豊潤な熟乳を眺めていると醸成されてくる陶酔感が意識をぐらりと揺らめかせた。

「ふふ……悠君をだっこするなんて小学生以来かしら。懐かしいわ」

「る、瑠美さん。子供扱いしないでよ」

未亡人は幼子をあやすように、背中に回していた手を後頭部に回し、丹念に撫でくる。勿論、過剰なまでのスキンシップが嫌なのではなく、美熟女と触れ合う嬉しさと恥ずかしさから来ているのだが、そんな本音を吐くわけにはいかない。

自分は一端の男であると言いたいところだったが、女体への免疫がない少年の身体は狼狽を取り除くのに難儀する。

「ふふ、そうね。お互い、今はとつてもエッチなことしているし……悠君も、昔とは違ってとつてもいやらしい目で私のおっぱいを見てくるもの」

「うっ」と、呻いた悠斗が視線を逸らすのが、それが無駄な行為なのは誰よりよくわかっている。互いの呼気さえ感じ取れる距離で、瑠美が不躰な凝視に気付かぬはずがな

い。悠斗が沈黙をもって罪を告白すると、未亡人はふんわりと紅の唇を緩めた。

「正俊さんもそうだったけれど、男の人って本当におっぱいが好きなのね。女の私には何がそんなにいいのかわからないけれど……はい、悠君。どうぞ」

「う、ん……そ、それじゃ……」

童貞であるのも原因だが、元担任となつて立場上は対等となつた春奈とは違い、悠斗を幼児期から知る未亡人とは今も明確な上下関係が成立している。

いざ手を伸ばしてはみたものの、隣人への禁忌やら倫理やらといったしがらみが、熟胸に触れる寸前で頑迷に性衝動を押し止める。

「あらあら、照れちゃつて……えいっ」

「うっ——わっ」

葛藤する少年の有り様に業を煮やしたらしい。美熟女は素早く悠斗の手首を握ると、そのまま自身の乳房へと押しつける。ジャケツトの上からそつと撫でるのではなく、ブラジャーのカップが変形し、半球の乳肉に指が埋没する接触。

（本当に瑠美さんのおっぱいを……ああ、こんなエロい巨乳を揉めるなんて）

強引に手首を引かれたものの、そんな驚きは掌に伝う豪奢な官能によって消し飛んでいた。腕にまで響き渡るずっしりとした乳肉の質感。指いっぱいに広げても掴みき

れない、実りに実つた熟れた女の果実。

常に悠斗を舐んでいた未亡人への遠慮など、牡の享楽を直に撃ち抜く刺激には何の束縛にすらなりはしない。

（これがおっぱいの感触……想像していただどんな感触もこれには及ばない）

春奈とキスを済ませていた悠斗だが、ハグを除けば二十八歳の女性にはまだどこにも手を付けていない。それだけに、初めて触れた未亡人の熟乳はかつてない感動を童貞の少年に与えてくれる。

タイトな布地とブラジャーに覆われているので、純粹に乳肉を揉んだとは厳密には言えない。それでも蕩けるような甘美な柔らかさは、悠斗の語彙では表現しきれない歓喜を味わわせてくれる。

乳房の外側からゆつくりと掌を閉じていくと、指に押された乳肉がネックラインへと追いやられていく。瀟洒なブラウスが半球の形に合わせて艶やかな波を打ち、ボタンの隙間から白い乳肌を垣間見せた。

未亡人の生乳を瞳が捉え、悠斗の情欲はますます興奮混じりの卑熟を帯びていく。

「こら、悠君。あんまり力任せに揉んじゃダメよ。スーツは大丈夫だけれど、ブラが傷んじやうわ」

「あっ——ご、ごめんっ」

ランジェリーの耐久性など、童貞にはわかるはずもない。三十八歳の豊乳を弄くっていた悠斗は、未亡人からの指摘を受け慌てて胸から指を離す。パイタツチに腐心していたこともあつてか、手首の拘束は気付かない間に解かれていた。

「おっぱいを揉めるのが嬉しかったみたいね。悠君みたいな若い子に夢中になつてもらえるのは、なかなか女としての自尊心が擽られるわ」

悠斗が素直に言うことを聞いたからだろう。ぎこちなく粗雑な童貞の愛撫も、未亡人は笑って許してくれる。カップの位置がずれてしまったのか、瑠美は己の乳房を擽り上げると僅かに左右へと揺らす。

本人にとつては何気ない動作でも、女を知らない少年にとつては破壊的なまでの誘惑となる。熟女が自ら乳を揺らしているようにしか見えない光景は、悠斗の獣性を煽り激しく高揚させた。

「服、脱がしていいかな」

自省をする間もなく、抑えの利かない本心が口を割って出る。女を蕩かせる修飾など一欠片も含まれていない、男の我欲で塗り固められた願望。春奈へ捧げる繊細な好意とは似ても似つかない、蒼く荒ぶる牡の劣情。

「ええ。はい、どうぞ」

そんな粗暴な欲求を、三十八歳の未亡人は艶然とした微笑みでもてなす。受け身一辺倒だった少年が、己の欲望に突き動かされて女体を求め始めたのが嬉しいのだろう。

瑠美は嫌な顔をするどころかわざと挑発せんばかりに腕を組み、熟れた豊乳を擽り上げる。柔らかに揺れた乳房がジャケツトから離れ、ブラウスに張り付くことでよりバストサイズが強調された。

(見たい……瑠美さんのおっぱいを、早く触りたい)

(体験版終了)